
偽りの聖女

トキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽りの聖女

【Nコード】

N0127Z

【作者名】

トキ

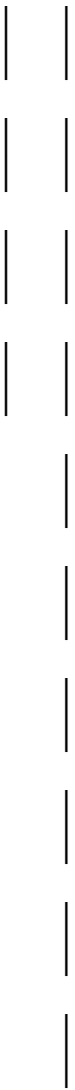
【あらすじ】

男性が死ぬほど苦手であるということを一番の理由に修道女の道を選んだ少女、コレット。彼女の歌う聖歌は、近隣の村の老人達から「癒される」と大評判だった。それを聞き付けた国王が、彼女を聖女として祀ると決めたものだから大変、連れて行かれた神殿で待っていたのは、聖女を守る騎士三人（全員男性）で——！？【逆ハーピーですがそうでもないかも。ヒロインどっぷり愛され系の甘々展開がお好きな方には、残念ながらお勧めできません。稀にコメディ・シリアス多め。ラストはしっかりハッピーエンドを目指しま

す

登場人物紹介（イラスト有り）

【偽りの聖女】 登場人物紹介



【登場人物紹介】

> i 3 6 1 3 9 — 9 2 5 <

コレット

15歳。

男性が死ぬほど苦手なことを一番の理由に、修道女として生きる道を選んだが、

あることをきっかけに、聖女に選ばれてしまう。

裁縫や料理は若干苦手で、畑仕事や大作業をしているほうが得意。

> i 3 6 1 4 0 — 9 2 5 <

セドリック

25歳。

ライナグル国の王子。

他人に対して冷たい態度を取る時もあるが、反面、部下には甘い部分もある。

> i 3 6 1 4 1 — 9 2 5 <

ジェイラス

17歳。

通称ジェイ。

口調も性格もラフで、人懐こい。

セドリックに仕えているが、その口調のせいでよくキアランに怒られている。

> i 3 6 1 4 2 — 9 2 5 <

キアラン

25歳。

落ち着きがあり、普段は穏やかだが、少々頭が固く礼儀作法などにはうるさい。

セドリックには幼少の頃より仕えている。

『イラスト提供 nicolaさんより Thanks!!』

ブログ（前書き）

初めまして、もしくはこんにちは！

拙作に目を留めて下さり、ありがとうございます。

不定期更新になる予定ですが、のんびりお付き合い頂けたら嬉しいです。

プロローグ

たぶん今私が置かれている状況のことを、『窮地』とか『危機』とか言うのだと思う。

広く豪華な部屋の中央に置かれた、これまで目にしたことさえないような天蓋付きのベッドの端に恐る恐る腰かけた私は、緊張に身を固くしていた。

別に、命を取られるとか、そう言った類の話ではない。

ではないけれど、私にとって『それ』は、何よりも恐ろしいもので……。

「——おい、コレット嬢。聞いてるのか!？」

「は、はいいい!？」

刹那、頭上から降ってきた若干苛立ちが含まれたような声音に、びくりと身体全体を跳ね上げる。

その瞬間、声の主とすっかり目が合ってしまった、慌てて顔ごと逸らした。

肩まで伸ばした淡い金色の髪に、深い碧色の目。均衡の取れた身体に、聖書の中に出てくる聖人のように整った顔立ちの男性。

そう、『彼』が、今私が抱えている最大の問題だった。

なぜなら――。

「聞いていたなら、今俺が話したことを言ってみろ」

身を乗り出し、私の両太腿の脇に手を付いて、彼、セドリックは威圧的に問う。

正面を向けばきつとお互いの鼻の先がぶつかりそうなほど近くまで彼の顔が迫っているのを感じ、私はこれ以上ないほどに身を硬直させ、不自然に首を捻った姿勢のまま早口に答えた。

「自分が修道女であつたことは今日限りで忘れる。ここで俺の指導の下、聖女として相応しい気品と所作、その他諸々を身に付けていってもらふ。いいな？　——おい、コレット嬢、聞いてるのか！？」

「……………」

顔を背けていても、彼が目を眇めたのを空気で感じた。どこか間違っていたのかと焦り始めた頃、やっとで彼は私から身を離れた。彼の重みを失ったベッドが軽く弾み、ふわりと身体が浮くような感覚がして、一瞬息を止める。

「最後のは必要ないが……聞いていたならいい」

セドリックは呆れたような口調で言うと、一つ、大きな溜息を洩らす。

私とは言えば、頑なに彼とは全く別の方向に顔を向けたままだ。

「さつきからずっと気になっているんだが、お前、なぜ目を合わせない？　俺と話すのがそんなに嫌か」

「そ、そうじゃな——っ！」

そこまでしか私の言葉は続かなかった。

セドリックの指が私の顎を強く掴み、おそらく醜いほどまで引き攣っていると思われる顔を、彼の方へと強制的に向けたからだ。

「人と話す時は、相手の顔を見る。田舎娘だとは聞いていたが、そ

の上礼儀知らずだとはな」

緊張が最高潮に達し、私の心臓は、今にも破裂してしまいそうだった。

気付いた時には私の腕は電光石火で彼を突き飛ばし、足は窓辺へと一目散に逃げていた。

身に着けた修道服のスカートを握り締めて、限界に達した緊張のあまり身を小さく震わせる。

がくがく震える膝に何とか力を籠め、呆氣にとられたように固まっているセドリックに、叫ぶようにして告げた。

それは、私が『修道女』という道を選んだ最大の理由だった。

「ごめつ、ごめんなさい、私、私は、男の人がダメなの、苦手なんです！」

第1話

「私が一体何をしたと言うの……もうやだ、帰りたい」

フカフカのベッドに頭から落ちるようにして身体を放り出し、私は突如自分の身に降りかかった不幸を嘆いていた。

これまで生きた十五年の歳月に起こった出来事で、こんなにも追い詰められたことはなかったと思う。

事の始まりは、いつもと何ら変わらない日の朝に院長様が私に告げた、思いもよらない言葉だった。

「シスター・コレット。あなたは今日、それも今すぐに、ここを出なければいけません」

これに対する私の反応は、大混乱。

瞬間、料理当番だった時に鍋をひっくり返してしまったことや、お祈りの言葉を間違えてしまったこと、それから、修道院を訪れていた小さな女の子のリボンが風に飛ばされて木の枝に引っ掛かり、それを取ろうとして木に登り派手に枝を折ってしまったことなどなど、自分がこれまでに犯した失敗の数々が一気に脳裏を駆け巡った。

けれど、修道院を追い出されてしまうほどの致命的なドジはしていない——はず。

慌てて、嵐にも勝る勢いでこれまでの失敗を懺悔し、引き続き修道院に置いてくれるよう懇願する私の言葉を、院長様は微かに引きつった笑みで遮った。

「違うのです。あなたを追い出そうと言うものではありません。あなたは国王陛下に聖女として認められたのですよ」

「聖、女……？」

まさかの理由だった。

一瞬、目の前が真っ暗になり、心臓が止まった気がした。

なぜ、今になって——と。

けれど、院長様が重ねた理由は、更に思ってもいなかったものだった。

「あなたが歌う聖歌が人々の心を癒すという評判が、国王陛下のお耳にまで届いたのです。国はあなたを聖女と認め、かつて聖人が住んでいた神殿に迎えるとお達しです」

「私の……歌？」

『なんだ、そんなことか』と安堵すると同時に、今度は『や、待つて、なんでそんなことで！？』という疑問と焦りが、瞬間、脳裏を怒涛のごとく駆け巡る。

「ちょ、ちよつと待って下さい、そんなの強引かつ無茶苦茶なこじつけです！　院長様だつてご存知でしょう、私の歌が人を癒すだなんて大袈裟な……　ちよつと村の老人会の人達に褒められてるだけじゃないですか！」

自分で言うのも何だけど、私は修道院での仕事のうちでは料理とかお裁縫とかは少しばかり苦手で、それよりも畑仕事をしたり、大工仕事をしているほうが向いているようだった。

まるで女らしくない私だけど、一つだけ、比較的女らしい特技もあつた。

それは、歌だ。

聖堂に立ち、共に学ぶ修道女達と声を合わせて歌う時、心が震えるような喜びに満たされる。

そんな私の歌を聞いて、村から礼拝に通ってくるお爺さんやお婆さんは、『コレットちゃんの歌を聞くと、本当に癒されるねえ』とか、『持病のリユウマチが軽くなったよ』なんて、目を細めて、大袈裟に褒めてくれるのだった。

私は素直にその称賛を喜んで受け取っていた。

とは言え、それが『聖人の奇跡』レベルには足元にも及ばないというくらい、年端もいかない子供にだってわかるはず。

この程度のことです聖女になれてしまうのなら、国はとくに聖人や聖女で溢れ返っていたっておかしくない。

——何はともあれ、私の必死の抵抗は当然あっさりと流され、このような経緯から住み慣れた修道院を去らなければならなかった。

実は院長様は私を氣遣つて告げなかったらしいけれど——と言うけど、本当のところとしては、そのことを私が知ったら逃げると思つたからに違いない——その知らせは七日ほど前に院長様の元に届けられていたらしい。

命じられるままに慌ただしく荷物を纏めて、それから修道院のこじんまりとした中庭に出ると、正面の石造りの門の前に、まるで王侯貴族が乗るような馬車^{かしま}が待ち構えていた。

その周囲には、珍しく姦^{かしま}しい声を上げるシスター達が群がっている。院長様が咳払いをすると、皆慌てて俯き、ばつが悪そうな表情

で自分の仕事へと足早に戻って行った。

彼女達が注目していたのはその馬車ではないということに、近付いてみてすぐに気付いた。馬車の元に、一人の、それも見栄えのする男性が控えていた。

短く整えたクセのない黒髪に、穏やかな琥珀色の瞳。

お城の広間で王様の傍に控えている騎士のような、細身の黒いロングコートを纏っていて、それがまた違和感もなくすんなりと似合っってしまう、そんな人物だった。

彼は待ち人——つまり、院長様と私を迎えると微笑み、もたもたしていた私の手から荷物を素早く受け取る。

そしてこれが、私に課せられた最初の試練だった。

「コレット様、お待ちしてました。私の名は、キアランと申します。貴女を神殿まで安全にお迎えする役目を仰せっております。さあ、どうぞ」

キアランと名乗った彼は、丁重に言って優雅に腰を折り、馬車の扉を開け、まるでお姫様にでもするかのように、私に手を差し出す。苦手な男性を目の前にして、肩を跳ね上げ身を竦めて後退りした私の背を、院長様が容赦なく馬車に押し上げた。

『院長様って、けっこうな年齢に達しているはずなのに、腕力は壮年の男性並みよね』と、シスター仲間が言っていたのが脳裏を過る。

外から閉じられた馬車の扉がまるで鉄格子のように冷たく感じられた私は、子供のようにみつともなく、思わず窓に飛び付いてしまった。

自分の終の棲家になるとばかり信じて疑わなかった赤レンガ造りの小さな建物と友達の姿が、見る間に遠ざかって行く。

その時点で私は既に、まるで地獄に突き落とされたような絶望的な心境に陥っていた。

けれど、それでも神殿に着くまでは、馬車の中も途中で泊まった街道沿いの宿でも院長様と二人きりだったからまだ良かったと、今になって思う。

本当の試練はここからだった。

五日かけて到着した私達を待っていたのは、私を迎えに来たキアランと名乗った彼を含めて三人の男性だった。驚くべきことに、彼らはこれから私の守護役としてずっと神殿に留まるという。

——『聖女と、彼女を守る三人の騎士』。

どうやら国王陛下は、この国に古来から伝わる聖女伝説を、忠実かつ律儀に再現するおつもりらしい。

「信じられない、本当に信じられない。リュウマチを軽くしただけでなんで聖女？ リュウマチがきっかけで聖女って何それ、ないわよそんなの、どんな人生よ」

枕に顔を深く埋めたまま、私は愚痴をこぼし続ける。

息苦しくなってきた頃に、やっとで顔を上げる。そして改めて、自分に与えられた部屋を見渡してみた。

そこは、私が二年間過ごした修道院の宿坊の一室とは、かけ離れた場所だった。

一人で住むには手に余りそうな、食堂並みの広さがある石造りの四角い部屋だ。

天蓋付きのベッドに、私の背の高さほどもある暖炉、高級だと一目で分かる机や椅子に、大きなクローゼットやセンスのいいデザインの鏡が付いたドレッサーなどなど、贅を極めた品々が揃えられている。

そんな中、机の足元に、私がほんの僅かな私物を詰めて持ってきた小さな旅行用トランク——修道院長様に贈って頂いたものだが、肩身狭そうにちょこんと置いてあって、とてつもない違和感を醸し出していた。

「……………」

私はのろのろと身を起こし、呆然と鏡の前に立つ。

くしゃくしゃで皺だらけな黒い修道服を身に着けた、酷い顔色の自分がじつと見つめ返してくる。

溜息を吐いて、ベールを乱雑に取り、跳ねた銀色の髪を指で梳いた。

それから、まるで糸が切れたマリオネットのように椅子に勢いよく身を落とし、両手で顔を覆う。

「落ち着いて、落ち着くのよ、コレット。大丈夫、きっと何とかなる、私が聖女だなんて間違いだったってことになって、すぐに帰れるわ」

自分自身を勇気付けけるように、ゆっくり、そしてはっきりと声に出して言う。

何か落ち込みそうなことがあると、いつもこうしてきた。そうすると、不思議なことに本当にどうにかなるような気がして前向きに物事を捉えることができるのだった。

けれど。

今回ばかりは、それも上手くないようだった。
それどころか、再びあの緊張の場面が鮮明に蘇る――。

第2話

神殿に着いてすぐ、院長様は私に別れを告げた。

慌てて縋り付いて引き留める私に、彼女はきっぱりと、にべもなく言った。

『あなたのことも心配ですが、残してきたシスター達も日々の務めを怠っていないか心配なのです。私は院長ですから、少しでも早く修道院に戻らなければ』と。

そして無情にも、私はたった一人で、ここに残された。

その後、私はキアランの案内の元、この部屋に通された。私の本音としては、即座に扉に鍵を掛けて永久に閉じこもってしまいたかったけれど、それも許されなかった。

キアランと入れ替わるようにして、また別の人物が私の元を訪れたのだ。

そして……彼が最悪だった。

「お前が“聖女”か」

私の顔を見るなり、彼は冷ややかに言い放つ。その口調は、決してこちらの答えを必要とはしていない、一方的なものだった。

いつもの如く、男性とはまともに目を合わせることもできずに己のつま先を見つめ続ける私に、セドリックと名乗った彼は、こちらが意見を差し挟む隙も与えずに、言葉の雨を頭上から浴びせる。

緊張に全身を固まらせながらも聞いた話を要約すると、こういうことらしい。

国王陛下は、国の経済政策のために、聖女を祀ることを思い付いた。

とは言っても、この国、ライナグルは決して貧乏国と言うわけではない。

ただ最近、隣のカルヴァート国が相当立派な大聖堂を建てたという事で、それに対抗するためとかいう何とも子供じみた……もとい、何とも競争心溢れる理由からだという。

古の伝説の聖女が現れたとなれば、近隣諸国から大勢人が集まり、彼らが落とす路銀や滞在費で国庫も潤うことはほぼ確実だろう——そんな目論みの元、聖女役として相応しい娘を探していた折に私の話が舞い込んだ。

そうして私はここに連れてこられることになった。

国王陛下は、伝説になぞらえ、聖女の傍に従う三人の騎士まで丁寧に揃えていた。

一見、『え、もしかして騎士としての素質じゃなく、見た目重視で選んだの?』と素で思ってしまうほどそれぞれ整った容姿をしているけれど、更に驚いたことに、そのうちの一人は何と国王陛下のご子息、つまりは王子だと言う。

それが彼、セドリックだった。

「俺は、お前が本物だとは思っていない。老人のリユウマチを軽減する程度で聖女だなんて、馬鹿馬鹿しいにもほどがある」

それには激しく同意だと声を大にして言いたいところなのに、舌が石のように重く動かない。けれど内心では、彼の言葉に『それなら帰してもらえるかもしれない』と淡い期待を胸に抱いていた。

でも、その考えは甘かった。

間を置かずに重ねられた言葉で、すぐに希望は打ち砕かれた。

「だから安心しろ、奇跡を見せろとは言わない。ただそれらしく振る舞え。聖女役を上手く演じられれば、それでいい。俺達も、聖女を守る騎士の役目を演じるつもりだ」

私は、言葉に出さずに、彼の言葉を繰り返す。

『演じる』。

そう、これは結局、国を挙げての壮大なお芝居の計画ということだ。

私は聖女役を演じ、彼らは聖女を守る騎士役を演じる。

……となると、私以外の三人は、やっぱり顔で選ばれたのかもしれない。

なら、聖女役も中途半端な理由で私を選ばないで、顔で決めればよかったのに。

聖女と言えどもっとこう、すらりとした体型の大人の女性で、気品溢れてて、神秘的で儂げな美人で――。

私が頭の中で何を考えているかなど知る由もなく、『騎士その一』のセドリックは淡々と続ける。

「しかし、お前は、子供の頃は母親と森で暮らし、母を失った後は田舎の修道院ですつと暮らしていたと聞いた」

本当ならここでも頷くなり何なりすべきなのかもしれないけど、首が思うように動いてくれない。

「と言うことは、だ。おそらく、聖女らしくと言われたところで、

どうしたら良いのかすらわからないだろう」

この瞬間に顔を上げることができたなら、世の中の女性達が一目で心を奪われそうな端正な顔が意地悪くもせせら笑っているという世にも残念な決定的瞬間をきつと目撃したことだろう。

——や、あくまでも、口調からの推測でしかないけれど。

「自分が修道女であったことは今日限りで忘れろ。ここで俺の指導の下、聖女として相應しい気品と所作、その他諸々を身に付けていってもらう。いいな？」

私は微塵も身動きすることなく、その命令が耳に虚ろに響くのを俯いてただ感じていた。

……これから、どうしよう？

私は、物心ついた時には既に男性が苦手になっていた。自分でもよく分らないけれど、彼らを目の前にするだけで緊張してしまい、顔は赤らみ、舌が固まり、うまく話すことができなくなってしまう。小さな子や、お爺さんなどは普通に接することができるのに、なぜか同年代から壮年の男性は、どんな人でもだめだった。

そのせいもあって、私は唯一の身寄りだった母を失った後は、迷うことなく女子修道院の門を叩いた。

規律の厳しさに始めは慣れなかったりもしたけれど、予想通りに、そこは私にとって居心地の良い住まいとなった。

あの静かな修道院で淡々と生活していられればそれだけで満足だった。

なのに——。

「——おい、コレット嬢。聞いているのか!？」

頭上から降ってきた叱責の声に、現実に取り戻される。

そして強引に彼の方へと顔を向けさせられた私は、自国の王子を突き飛ばすと言う、自分でも信じられない暴挙に出てしまったのだった。

これに当然のことながらセドリックは怒った様子で、無言で部屋を出て行ってしまった。

その後の私と言えば、自分の不甲斐なさ境遇を嘆き、ずっと枕に顔を沈めていたのだった。

「あああ、私の馬鹿」

既にしてしまったことをいくら悔やんだところでどうしようもないけれど、そうは思ってもやっぱり悔やまずにはいられない。

顔を覆っていた両手をゆっくり下ろし、再び鏡の中の自分と目が合った、その刹那。

何の前触れもなく礼儀正しく扉を叩く音が響いて、私は思わず息を止め身を竦めてしまう。

「コレット様？」

躊躇^{ためら}いがちに私を呼んだのは、女性の声だった。

それに気付くやいなや、私は急いで扉に飛び付いて訪問者を迎え入れる。

「良かった、ここにも女の人がいるのね!？」

勢い余って抱き付きかねない私の様子に、私とほぼ同い年くらい

に見える彼女は、大きな目を真ん丸にして驚いた。

けれどそれも一瞬のことで、すぐに自分の役目を思い出したようだった。

軽く両膝を曲げて腰を落として挨拶し、屈託なく微笑む。

「キヤスと申します。コレット様の身のお世話の役目を仰せつかっております」

女の人がいたことに喜びを隠せなかったけれど、『コレット様』という呼び掛けと、上流階級の間人相手にするような対応にひどく落ち着かない気分になり、私は思わず眉尻を下げる。

「ええと、キヤス、つまりあなたはこれから、私のここでの生活を手助けしてくれるってことよね？ それならお願い、コレット様なんて呼ばないで。私は、そんな特別な者じゃないわ、単なる修道女で」

「まあ！ まだそのような服装でいらしたんですね。すぐにお着替えを用意しなくては。そろそろ夕食の時間でございますから」

私の言葉をキヤスは早口に遮り、まるで修道服を生まれて初めて目にしたとも言つように、まじまじと眺める。

「夕食？ この服装ではだめなの？」

彼女には色々と話したいことや聞きたいことがたくさんあったけれど、夕食と服装にどのような関係があるのかいまいち掴めず、反射的にそう返していた。

修道院に入る前も修道院でも、食事のためにわざわざ着替えをすることなどなかった。

「ええ、もちろんです。そのような質素な服装でセドリック様達とお食事をされるなど、もつての外です」

「え、セドリック……様と！？　って言うか、達！？　達って、まさか……いえ、私は一人でいい、この部屋で、パンとミルクがあれば十分だから！」

それにキヤスは『ご冗談を』と笑うけれど、冗談ではない。むしろこちらが『ご冗談を』と笑いたい。

私の青筋には全く気付かないキヤスは、クローゼットを開け、ぎつしり詰まった華やかでヒラヒラした服のうちの一つを手にとって広げて見せる。

淡い空色の絹の生地、レースや刺繍を施した、まるで結婚式で花嫁が身に着けるような豪華なドレスだった。違うことと言ったら、色くらいだと思う。

「コレット様には、こちらがお似合いになると思いますよ」

「って、ちょ、何それウェディングドレス！？　夕食よね、単なる夕食よね！？」

そして私は、こちらの意見など全く聞く耳なしのキヤスによって強引に修道服を剥ぎ取られ——彼女もまた院長様と同じく、見た目に寄らず馬鹿力だった——、食事にはおおよそ不向きのドレスを着せられ、おまけにこれまでしたことなどない化粧まで施されて、与えられた自分の部屋から追い出されたのだった。

第3話

これもまた今まで見たこともないような華やかなダイニングルームに、重い静寂が満ちている。

この部屋にいるのは、たった四人だった。数人見かけた使用人らしき人達は、料理を出すとすぐに扉の向こうへと消えた。

どことなく気まずい空気が流れる夕食の、おかしくなりに広いテーブル。私はその端に着いて、ナイフとフォークを手に、ただただ目の前の料理に視線を落としている。

修道院での食事に比べると、天と地ほども差がある豪勢なものはあったけれど、だからと言って一心不乱に眺め続けるほどの興味が皿の上にあったわけじゃない。

前を――厳密に言えば、テーブルに着いた顔ぶれを見ることができないためだ。

私の正面には『騎士その一』、そして左右にそれぞれ一人ずつ、『騎士その二』、『その三』である彼らが座っている。

顔を上げていれば、いつか誰かしらと目を合わせることになるのは必至だった。あと他に見る場所と言ったら、天井くらいしかない。そんなわけで私は、消去法で唯一残った手元を食いいるように見つめ続けている。

「コレット様、部屋に不満などありませんか？」

その場の沈黙を破ったのは、『騎士その二』――キアランの柔らかい声だった。三人の中ではまだ、何となく、本当にわずかにだけど話やすそうな彼に、私はどうにか目を向ける。

「え、ええ、大丈夫。私には贅沢過ぎるくらいだわ」

それにキアランは満足げに『良かった』と言い、微笑んだ。

「コレットは男嫌いなんだって？」

何の前置きもなく唐突に訊ねられ、私は口元に運んだ水のグラスを落としそうになってしまう。

この神殿に到着して初めて顔を合わせた時の記憶を、緊張のためにうまく働かない頭から、必死に引っ張り出す。

にこにこした笑みでこちらを見ている『騎士その三』の、長く伸ばした赤い髪が特徴的な彼は、そう、確か、ジェイラスという名だった。

彼は私と一番近い年齢で十七歳だと、私に手際よくドレスを着せる間にキアスが話していた。彼女はもうやら相当なお喋り好きらしく、手と同様に舌が止まることもなかった。

そんなわけで、キアランとセドリックは二十五であることも（聞いてないけど）教えてくれた。

ちなみに、彼女がキアランの名を口にする時は、必ず蕩けるような眼差しになる。

まあ、気持ちとは分からなくもない。男性が苦手で修道女という道を選んだ私だけど、そういう感情を否定するわけではない。

キアランは、セドリックと違って口調も物腰も柔らかいし、優しいし、笑顔もとても素敵だと私だっている。だから、きっとすごく女の子に人気があるんじゃないかな。

——それはさておき。
頭を、今に切り替える。

完全に大人の男性の雰囲気を身に纏っているキアランやセドリッ
クに比べ、ジェイラスは、微かにまだ少年の面影を残しているよう
に感じた。

それは年齢的な見た目の問題ではなく、軽い口調や所作といった
もののせいなのかもしれない。

私はテーブルに戻したグラスを意味もなく両手で支えたまま、言
葉を必死に探した。

「あ、あの、えっと、それは」

「いやー、セドリック様がぶすーっとしてたものだから、何があつ
たのか聞いたら、男は嫌いだったって、張り倒されたって」

「ジェイ！」

咎めるようにすかさず声を上げたのは、セドリックだった。

真っ直ぐ見ることができずに伏せた睫越しに彼の顔色を窺うと、
微かに顔が赤くなっているような気がする。

ジェイラスは『わかった』とでも言うようにセドリックに愛想笑
いを見せてしてから、再び私に向き直った。

「で、どうなの？ やっぱり女子修道院とかにずっといると、男嫌
いになっちゃうもんなのか？」

言いながらも、グレーの明るい目も、それに口元も、心底楽しそ
うに笑っている。今しがたセドリックに怒られかけたことなど、既
にきれいさっぱり忘れているようだった。

「そ、そうじゃなくて、私は、もともとで……その、男の人と話す
ことが少なかったっていうのもあるかもしれないけど」

「へえ。でもさ、男だからってなんで？ 男も女も、同じ人間だろ
？」

矢継ぎ早の問いかけに、私の頭は混乱し、パニック寸前だった。

確かに、彼の言うとおりだ。男だって女だって、同じ人間であることには変わらない。

……なのになぜ、私はこんなにも緊張してしまうの？

言葉に詰まる私を見かねたらしいキアランが、助け船を出してくれた。

「ジェイラス、あまりレディを困らせるようなことを言うものじゃない」

「レディってな……。キアラン、その相変わらずの堅苦しい騎士道精神っての？ とうにかなんねえの？」

「お前こそ、もう少し礼儀作法を身に着けたらどうなんだ。だいたい、いくらセドリック様がお許し下さるとは言え、王太子殿下に対する態度というものだって」

この二人は、もしかしたらいつもこんな感じで言い争いをしているのかもしれない。放っておいたら永遠に続きそうなキアランの小言を、セドリックの良く通る声が遮った。

「とにかく！ こうも緊張されては、聖女としての役目云々以前の問題だ、話にならない」

一気にその場の全員の視線が私に集まり、思わず椅子の背もたれに背中を貼り付かせてしまう。

そんな私を人差し指で示し、セドリックは、目を細めて告げる。

「いいか、コレット嬢、何が何でもその男嫌いを克服してもらおう。

そのためには、常に、俺達の誰かと行動しろ」

「ええッ！ 常に……！？」

「ああ、うん、それがいいかもな。習うより慣れろってやつだ」

「常に……！？」

「そうですね、長い時間を共に過ごせば、自然と肩の力も抜けるかもしれませんね」

「常に……！？」

「くどいぞ、コレット嬢」

動揺を隠せない私に、セドリックが腕を組んでぴしゃりと言いつつ。

身に纏った空気で一瞬に人を黙らせるその圧倒的な雰囲気、私はふと、ある人物を思い出していた。

——院長様だ。男性版院長様だ。や、見た目は全然違うけど。

私が頭の中で何を考えているかなど知る由もないキアランが、すっかり大人しくなった私に微笑んだ。

「では、明日の朝はわたしが神殿を案内します。これからはここがコレット様の家となるのですから、色々と知っておいて損はないでしょう」

「じゃあ、俺はその後で近くの街に連れてってやるよ。ここら辺は果物ぎつしり詰め込んだタルトと、あとワインが名物でさ、すっげえ旨いんだぜ」

キアランに続いたジェイラスの提案には、セドリックが眉根を寄せる。

「おい、ジェイ、初っ端しょばなから遊び歩かせてどうする」

「ええー、ダメっすか？ 夜に行くよりは健全でいいと思いますけど。ってか、もしかしてアレですか、セドリック様、自分が連れて行きたいとか？」

「馬鹿を言っな。子守りは神殿の中だけで十分だ」

「子もっ……！？」

その言葉には、さすがに反論しなくなってしまふ。

もし舌が滑らかに動けば、土砂降りの通り雨のように、異論をぶちまけたことだろう。

それと同時に、なぜセドリックが私を『コレット嬢』と呼ぶのか理解した。彼にとつて私は、修道女でも聖女でもなく、所詮『田舎育ちの小娘』でしかないのだ。

二十五歳からしたら十も離れている私は子供にしか見えないのかもしれないけど、それにしても『子守り』だなんて――。

「とにかく外出はだめだ、今後一切禁止とする。これから“聖女”として振る舞ってもらおうというのに、一般庶民のように外をふらついて見せてどうする。そんな聖女、俺は嫌だ、説得力がまるでない」

組んだ腕を崩さず、横暴な口調で言い放つ。

――『嫌だ』って、ちょ、自分の好みの問題！？ あとついでに、それって世間一般では監禁って言わない！？

内心ではすかさず突っ込んでいた私だったけれど、意義を申し立てようにも口が動かなくてはどのようなもない。

キアランも、そしてジェイラスでさえも、どうやらセドリックに逆らおうという考えは一切ないらしい。彼の自己満足とも思える命

令に、驚くほどあっさりと頷いた。

そして同時に私は、ある決意を胸に抱いていた。

どうにかして、早いうちにここから逃げ出そう、と。

第4話

眩しい陽の光が、重なった木の枝の隙間から地上目指して幾本も伸びている。懐かしい森の空気に触れ、私の心に、柔らかな感情が満ちる。

ふと、誰かが私の名を呼んだ。

振り返ると、秋の日差しに輝く小麦の穂のような金色の髪が、真っ先に目に飛び込んだ。

そこには、一人の青年が、屈託のない笑顔を浮かべて立っていた。彼は日差しを背にしている、顔はぼんやりとしかわからない。

でも、私は、この人を知ってる。

彼が、そっと私の両手を取って、綺麗な目で私の顔を覗きこんだ。刹那。

十五歳の私は、いつの間にか七歳の子供に戻っていて、自分よりもだいぶ背の高い彼を見上げていた。

——コレット。約束だ、必ず迎えに来る。だから……。

私は微かに頬を赤く染めて、それに答えようと言葉を探す。けれど、声の代わりに口から飛び出したのは。

『グウ』

空腹に耐えかねた胃が捻り出した、何とも情けない音で、私は現

実の世界に引き戻された。夢の中以上に顔を真っ赤にして慌てて身を起こし、素早く周囲を見渡す。

そして今この場に自分しかないということを確認すると、安堵に胸を撫で下ろした。再び、身体をフカフカの羽根布団へと沈めて軽く目を閉じる。

あの緊張の夕食後、断つても聞かなかったキアランにエスコートされて部屋に戻ると、扉の前でキアスが待ち構えていた。

憧れの人物を前にして、彼女が頬を少女らしく染めたのは、一瞬のこと。

部屋に入るなり腕まくりをして私のドレスを脱がしにかけ、抵抗する私をあつさり奥の部屋の湯を張ったバスタブに細い両腕で放り込んだ。

されるがままに全身を泡立てたスポンジで擦られる心境と言ったら、まるで修道院で飼われていたヤギにでもなったかのようだった。そしてその後、就寝用の柔らかいリネンのローブに着せ換えられ、これまでの疲れからか、いつの間にかベッドの上に倒れ込むようにして眠りに落ちてしまっていたらしい。

「ずいぶん懐かしい夢……久し振りに見たなあ」

脳裏に焼き付いた、夢と言うにはあまりにも現実味を帯びた景色が、閉じた目の前に広がる。

それは、小さい頃に何度か見た夢だった。

夢の中の私は、不思議なことにあの男の人だけは大丈夫で、彼を目の前にしても緊張して震えたり、みつともなく固まってしまふことはない。

子供だった頃は、あれが本当にあったことだとばかり考えて信じて疑わなかった。彼と再び会えると信じ、いつか迎えに来てくれるのを本気で待っていた。

でもいつの間にか、あれは現実ではなく単なる夢で、男性が苦手な自分が見る、一種の願望を現したものだっただんだと思うようになっていた。

子供が大きくなるにつれてお伽噺を信じなくなるように――。

唯一の家族だった母が亡くなって、修道院に入ってから一度も見えていなかったことを思い出し、一人苦笑する。

「久し振りに、ものすごく緊張したせいかな」

窓のほうへ視線を投げると、分厚いベルベットのカーテンの端から既に薄い光が零れていた。

もしかしたら、これからまた頻繁にあの夢を見てしまうかもしれない。ここを逃げ出す機会を見つかるまでは、きっと気が休まることはないのだろうから。

どうやら昨夜のセドリックの言葉は律儀に守られる様子だった。

キヤスが私の身支度を整え終わるのを計ったかのように、ジェイラスが扉の前に迎えに現れた。

朝食後は広い神殿内をキアランに案内され、昼食後はセドリックに上流階級の歩き方や仕草、それに話し方をみっちり一から叩き込まれ、夕食後にはジェイラスが、山積みになった勉強用の本に顰め面を向けている私の傍に付いて、同じく何やら本を読んでいた。

とは言え、彼の方は何度も欠伸を噛み殺していたりして、だいぶ退屈そうではあったけど。

夜になって、自分の部屋に戻った時だけが唯一、肩の力を抜ける時間だった。

セドリックは『常に』とは言っただけで、さすがに寝る時ばかりは、当然のことながら例外だった。

けれどその貴重な時間も倒れるようにして眠りに落ちてしまい、気が付けば既に陽が上っていて、全く覚えのないうちに過ぎてしまったのだった。

そして翌朝にはまた扉の前にジェイラスが立ち、朝食後はキアランと運動がてらに広い神殿や庭を散歩、午後はセドリックと猛勉強、夜は時々ジェイラスと片言に会話をしながらの自習という日々が瞬く間に過ぎて行った。

「そろそろ、かな」

十日目の夜、キアスが部屋を出てから、私は扉に内側から鍵を掛けて一人呟いた。

これまでの毎日、ただ言われるままに過ごしてきたわけではない。キアランと歩きながら、そしてジェイラスと話しながら、逃走経路と近隣の街の情報などもしっかりと頭に入れていた。

セドリックによると、三日後には私はとうとう聖女として神殿の中央の謁見の間に立たなければならないという話だった。

逃げるなら、今しかない。

自分を勇気付けるように、唇を噛み締めて、頭を振り立てる。

ここにあった物は全て置いて行くつもりで、慣れた修道服に着替え、窓を開ける。

この部屋は二階に位置しているけれど、窓のすぐ下には一階部分の屋根があり、そこを歩いて木に飛び移れば誰にも見つからずに下

に降りて逃げられそうだ。

お腹に力を入れて覚悟を決め、片足を窓にかけようとした、その刹那。

「あれっ、こんな時間にそんな格好で何してんの？ 一人で修道女ごっこ？」

「っ、きゃああああ！？」

窓の外からひよっこりと見覚えのある赤毛が覗き、私は思わず悲鳴を上げる。そこにいたのは、驚いたことに、ジェイラスだった。

「そそそそっちこそなんで！？」

「ちよっとした差し入れ持って来たんだ」

楽しい笑みを顔に広げ、彼は軽い動作で部屋に身を滑り込ませた。その手には、バスケットが握られている。

「言っただろ、この辺はタルトとワインが名物だっつて」

蓋を開けて私にそれを差し出す。

押し付けられるようにして渡されたバスケットを受け取ると、中には赤ワインの瓶と大きなタルトが丸々一個、焼き上げたままの形で入っていた。

甘い果物と砂糖の匂いがふわりと漂い、鼻孔をくすぐる。

「コレット、いつもあんまりメシ食ってないだろ。たぶんまだ緊張してんのかなって思ってたさ。自分の部屋でなら、思い切り食えるだろ？」

「……あ、ありがとう」

気付かれていたことに驚いて、一瞬、言葉を失ってしまう。でもすぐに、すんなりとお礼の言葉が口を突いて出た。

「セドリック様もキアランも心配してたんだぜ、コレットの食があまりにも細いもんだから、いつか倒れるんじゃないかってさ」

「え、セドリック……様も？」

ついいつもの習慣で『セドリック』と呼び捨てにしそうになり、私は慌てて『様』を付け加えた。

セドリックには、『俺のことは呼び捨てで構わない』と言われている。公衆の面前で聖女が自分を『セドリック様』と呼ぶのは、あまり威厳を感じられないからという理由らしい。

なら、その公衆の面前の時だけにすれば良いのにと考えたのが顔に出ていたのか、更に彼曰く、『お前は緊張してうっかりいつもの習慣で様を付けそうだ』とのことだった。

——失礼な。

とは言えなかったのは、いつものように緊張していたからというものもあるけれど、自分なら本当にやりかねないと思ったのも実はあったからだったりもする。

そういう経緯からではあったものの、何となくキアランやジェイラスの前でまで呼び捨てにするのも気が引けてしまうのだった。

「まさか、だって、私は嫌われてるんだと……」

床に目を落として弱々しく呟いた私に、ジェイラスが不思議そうに訊ねた。

「嫌う？ セドリック様が、コレットを？ なんで？」

「だって、私、初めて会った日に突き飛ばしちゃったし、私といういつもどことなく不機嫌そうだし、全然笑わないし」

途端、ジェイラスが小さく吹き出して、驚いた私は思わず顔を上げた。

「違う違う。セドリック様ってああ見えて不器用なんだよ。素直じゃないっつーか。本当に横暴で冷徹な人だったら、オレも付いてかないって」

「そ、そうなの？」

「当然！ オレ、前に仕事でミスっちまってさ、王様の逆鱗に触れたことあって。で、その場で即刻首落とされてもおかしくない状況だったんだけど、セドリック様に助けられたんだ。そんな時に決めたね、これからは何があってもこの人に尽くそうってさ」

……く、首落とされるような失敗！？

私もこれまで修道院で、それにここに来てからも緊張のあまりテイーカップを落としてしまったりとか色々失敗はしているけれど、死ななきゃいけないほどのことはしていない。

一体何をしたら、そこまで怒られる羽目になってしまうのか想像もつかなくて、私は恐る恐る訊ねた。

「ジェイラスの仕事って……？」

「あー、それは秘密っことで。ま、当面は、聖女に従う騎士のフリするのが仕事だけだ」

彼の言葉で、三日後に迫ったそのことを思い出し、私は思わず眉を曇らせる。

「緊張するなつて言う方が無理だけどさ、コレットなら上手くやれるって信じてる。これまで見てきたけど、ずっと頑張ってるじゃんか。せっかくだから楽しもうぜ、劇場の舞台にでも立ったと思ってるさ」

軽く片目を瞑って見せ、じゃあな、と短く言ってジェイラスは窓から外へ飛び出して行った。

「……あ！」

慌てて下を覗いて見るけれど、その姿は既に闇に飲まれて見えなくなっていた。ふと、手に持ったままだったバスケットに目をやる。呆然と、そのまま力なくベッドに腰掛けて、私は俯いた。

「参ったなあ……。なんだか逃げにくくなっちゃった」

手に持ったタルトのバスケットは、まだほのかに温かった。

第5話

遠い昔に、この国に実在したと言われる聖女様。
私も、幾度となくその伝説は耳にしてきた。

流れるような漆黒の髪に、空色の優しい瞳。その声は鈴の音のよう
に心地よく人々の耳に響き、微笑みは愛らしくも美しい。

彼女が聖女と呼ばれた所以^{ゆえん}、それは癒やし^{ゆえん}の力だ。彼女が手を翳
せば、どんなに重い病にかかった者もたちどころに治すことができ
たと言う。

その力を狙う近隣諸国や悪人達から彼女を守ったのが、三人の騎
士だ。彼らもまた人並みはずれて勇猛果敢かつ眉目秀麗だったと伝
えられている。

「ま、伝説なんてどこまでが本当かなんてわかんねーよな。だいた
い、何もかも完璧だとかなんて人間らしくなさ過ぎだし」

……えーと、バルコニーに出たらちゃんと顔上げて前を見て、

「ジェイラス、お前はまたそんな不謹慎なことを」

……背を伸ばして、ひたすら堂々と、

「伝説の真相はどうであれ、とにかく、らしく振る舞えばいい。キ
アランとジェイはともかく、不安なのは……」

……大丈夫、どうしてもダメになりそうだったら、下にいるのは人じゃなくて、畑に並んだ野菜だと思って――

「コレット様、ですね」

「おい、コレット嬢。さつきから壁に向かって一人で何をブツブツ言っている」

「しかも野菜って、なんでまたそれ？」

「はえっ!？」

三人に突っ込まれ、私は素っ頓狂な声を上げて、勢いよく背後を振り返った。

ここは、神殿の正面の庭に面した広い部屋。
その中央に置かれた大きなソファとその傍に、騎士役としての身支度を済ませた三人がいる。

白を基調とした上品な衣服に裾の長い紺色のマントを羽織り、腰には大きな剣という出で立ちは、まさに人々が抱く伝説の騎士達のイメージ通りだった。

森の中と修道院で生きてきた私からしたら、彼らは普通の姿ですら別世界の人物に見えるのに、今は尚更だった。
変な言い方だけど、眩し過ぎて直視できない。

――や、直視できないのは、いつものことではあるのだけど。

ちなみに私自身も同じく、白いシンプルな形の細身のドレスを身に纏い、身体が重く感じるほどの装飾品で全身飾り立てられてはいるけれど、似合っている自信はこれっぽっちもない。

けれどもキヤスは、自分の仕事に大きな自信を持っている様子だった。満足気に何度も頷く彼女の隣で私は、むしろ祭日のためにこれでもかと山盛りに飾り立てられた木にでもなったかのような不思議な心境に陥ったものだ。

ついでに言うなら、普段は下ろしている髪を今は硬く編みこんで纏め上げているので、首筋が微妙に寒い、なんてことも考えていた。

「あ、あの、もしかして、声に出ちゃった？」

三人の、呆れるやら苦笑するやらの何とも言えない視線を受けて私は、瞬く間に顔に血が上ってゆくを感じた。

「うん、ダダ漏れ」

相変わらずのジェイラスの言葉遣いにキアランが溜息を落とす。そしてジェイラスに向かって口を開きかけたものの、もう諦めたとも言つうように首を軽く振り、そして私に向き直った。

「コレット様。失敗しても私達がうまくごまかしますから、安心して堂々としていて下さい」

それに曖昧に頷きながら、私は落ち着きなく、壁一面を埋め尽くすガラス張りの窓へと意識を向ける。その先には、軽く十数人は立てる広さのバルコニーが広がっている。

ここから逃げ出そうとしたあの晩から早くも三日が経ち、いよいよ聖女のお披露目の日を迎えてしまった。

今、バルコニーの下に広がる神殿の庭園には、『聖女が再び世に現れた』という噂を聞き付けた人々が集まっている。

しかもこの噂は国王陛下自らが率先して国中に広めたと言つのだ

から、この計画にどれほどの熱意を注いでいるかが窺える。

王様はよっぽど暇なのだろうか、と思ってしまうたけれど、それをセドリックに訊ねる勇氣など欠片も持ち合わせていないのが、ほんの少しだけ悔やまれた。

それはともかく。

ジェイラスは面白そうに、キアランは確認のためという様子で何度も外を覗いていたけれど、私は一度も壁の傍から離れていない。と言うのも、どれほどの人数が集まっているのかを先に知ってしまうのが、怖かったから。

「そろそろ時間です」

窓辺に立ったキアランが、高く昇った陽を見上げて私達に告げた。セドリックが無言で頷き、身を沈めていたソファからゆっくりと立ち上がる。

それを合図に、壮大なスケールのお芝居の幕が上がった。

キアランがバルコニーへのガラスの扉を開き、ジェイラスが彼に続く。

途端に人々の歓声が溢れて空気を揺るがし、私はその衝撃に身を竦めてしまふ。

「行くぞ」

壁から一步も離れられないでいた私に、セドリックが手を差し出す。

毎度のことながら一瞬躊躇^{ためら}ってしまった私だったけれど、すぐに意を決して深呼吸し、彼の手に自分の掌を重ねた。

私が素直に応じるとは思っていなかったんだと思う、セドリックが微かに目を見開き、そして驚いたことに、淡く微笑んだ。

「……よし、よく逃げなかった。お前にしては上出来だ」

初めて見る彼の柔らかな表情に、馬鹿みたいに呆気に取られて固まってしまう。たっぷり数秒見つめてしまっていたことに気付いて、慌てて視線をバルコニーへと投じた。

「だ、だって、ここまで来たら、やるしかないじゃない！ 舞台から飛び降りる覚悟で行くわ」

「覚悟は立派だが、本当に飛び降りるなよ。さすがにそれは、キアランでさえもおそらくフォローしきれない」

珍しく笑ったかと思えば、すぐにまたいつものように冷たく返す。そんな彼に対するささやかな応酬として、私は内心でこっそりと小さく舌を出した。

エスコートされて、雲一つないほど晴れ渡った空の下、バルコニーの奥へと進み出る。

——瞬間、目が回りそうになった。

一体どこからこんなに集まったのかと思うほどの群衆が広大な庭園いっぱいにはひしめき合い、こちらを見上げている。

キアランが人々に向かって予め決められていた通りの科白を叫んでい^{せうぶ}るけれど、それすらも私の耳には届かない。もはや緊張なんて域を通り越して頭が真っ白になっている。

——ど、どうしよう、もしかたつた数人しかいなかったらそれはそれで何だか恥ずかしいかも、とか思っていたけれど、ここまでの人数が集まるなんて……！

セドリックに預けていた手が微かに引かれて、弾かれたように息を呑む。

「おい、コレット嬢、しっかりしろ。ここでお前が手を振るという段取りだろう？」

私に反していつもと全く変わらない表情のセドリックが、群衆の声を遮るように、私の耳元で早口に囁いた。

それに慌てて指示されたようにすると、一際大きな歓声が、まるで爆発したかのように辺り一帯に轟いたのだった。

第6話

バルコニーでのお披露目という一番の難関は無事に突破したものの、その後も大変だった。

場所を神殿中央の謁見の間に移し、行列を作る人々の全てに、私は祝福を与えなければならなかった。

跪ひざまずいた人の、恭いさしく下げられた頭に軽く手を置いて、お決まりの短い文句を呟く。

ただそれだけではあるけれど、ずっと神妙な表情を崩さず、頭も高く掲げたまま、そして作った声音のままでいなければならないのは、想像以上に精神力を必要とすることだった。

そしてそれが数え切れないほどの回数にもなってくると、その場で叫び出したくなる衝動にすら駆られた。

やっとで謁見の間から離れられた時には、私はその場に膝を付いてしまいそうになるほどに疲れきっていた。

いつも勉強部屋として使っている部屋のソファにぐったりと身を預けた私に、キアランが熱い紅茶を差し出してくれた。

「どうぞ。今日のコレット様は、完璧な聖女でしたよ。壁に向かつて話されていた時は、心配になりましたが」

「……そのことはお願い、忘れて」

彼だっずっと姿勢を正したまま立ちっぱなしで疲れているはずなのに、そんな素振りすら見せない。私なんて、今すぐにでも部屋に戻り、細い靴と身体を締め付けるドレスを脱ぎ捨ててしまいたいほどなのに。

恥ずかしさに目を泳がせながらもお礼を言い、カップを両手で支えて口に運ぶ。微かに舌に感じた蜂蜜の甘さに、無意識に頬を緩めたその時だった。

遠くから誰かが叫ぶような声が聞こえ、キアランが怪訝に眉を寄せた。彼が扉を開くと同時に、その騒々しい物音が部屋中に雪崩れ込む。

耳に届いた女の人の声に、私も思わず駆け寄って廊下の先を覗く方向から察するに、騒動は、一階の玄関ホールで起こっているようだった。

「コレット様は、このままこちらに」

落ち着いた声で言い、キアランが足早に部屋を出て行った。

私はその場で少し考えた後に、やはり好奇心には勝てずに彼の後を追った。広く長い廊下を小走りに進み、突き当りを曲がる。

その先には、二階部分まで吹き抜けになっている高い天井の玄関ホールがある。

キアランは、二階の階段上に置かれた白い大理石の彫像の影から階下を見下ろしている。私もその隣に立った。

咎められるかと思ったけれど、私に気付いたキアランは『静かに』と身振りで示しただけだった。そして再び視線を騒ぎに向ける。

それを追うと、ホールの中央で、髪を振り乱した女の人が使用人の男の人二人に止められている光景が目に見え込んだ。

彼女の身に着けている服は、本当にただ身体を覆うためだけのものというような、飾り気など全くない粗末なものであることが遠目からでも窺える。

「どうか、どうかお助け下さい！　聖女様に会わせて！！」

ただ事ではない悲痛な叫びに思わず身を乗り出そうとした瞬間、顔の真横に腕が伸びて二階廊下の手摺を掴み、うっかり声を上げそうになってしまう。

それを何とか両手で口の中に押し戻し、恐る恐る腕の先を見上げると、グレーの瞳とぶつかった。

ジェイラスだ。そして彼の背後には、セドリックの姿もある。

「何の騒ぎだ？」

ジェイラスが小声で訊ねる。私はそれにただ首を横に振って見せた。

私達が二階から様子を窺っていることには気付かず、女の人、使用人に必死の様子で縋り付く。

「ネリーが、娘がもう三日も大熱に苦しんでるんです！　でも、でも私には薬を買うお金もなくて……どうかお願いします、聖女様のお力で、あの子を助けて下さい！　まだ二歳なんです、お願いします！　す！」

「大変……！　でも」

口の中で呟いて、私は、眉根を寄せる。

——今の私には、何もできない。

「だから言っているだろう、今日の謁見はもう終わったんだ、帰らない！」

「！　待つ……」

あまりにも非情な対応をする使用人を止めようと飛び出しかけた私の腕を、セドリックが掴んで引き戻す。

「やめろ、ここはあの二人に任せておけ」

私を真っ直ぐに見下ろして、感情の籠らない声音で静かに言い放つ。

そうこうしているうちに、女の人の悲鳴のような懇願の叫びは離れて行き、重い扉が閉まる音がホールの空気を震わせた。

固く閉ざされた扉を、啞然と眺める。

私の隣でジェイラスが決まり悪そうに肩を竦めたのが、目の端に引っ掛かった。

「コレット様、戻りましょう」

宥めるように言うキアランの静かな声に、私は、やっとで我に戻る。

目で確認することもなくその場を立ち去ろうとしたセドリックを、私は慌てて全力で追い掛けた。

いつもなら、こんな風に自分から追いかけるなんてことはない。

けれど、今だけはどうしても納得がいかなかった。身体の底から湧いてくる沸々とした怒りが、私を突き動かしていた。

「待つて！ どうしてあんなに冷たい態度が取れるの！？ まだたった二歳の子が病気なのよ！ 何とも思わないの！？」

噛みつくようにその背中に向かって叫ぶと、セドリックは歩みを止めて肩越しに振り返った。

「俺だって気にならないわけじゃない。できることなら助けてやり

たいと思う」

「なら、薬代を渡すとか……！」

「いいか、よく考えてみる。求められたのは、薬を買うための代金じゃない、聖女の奇跡だ」

「そんなことわかってる！」

「いや、コレット嬢、お前はわかってない。ここで代わりの金など渡したらどうなると思う？」

良い結果になるであろう当然のことを訊ねられ、私は、その質問の意図が分からずに瞬いた。

「どうって、あの人の子供が助かって……」

私の尻すばみの答えに、セドリックは小さく顎を引く。

「そうだ。そしてその行為は、聖女は奇跡を起こすことなどできない偽物だと周囲に知らしめることになる」

「……っ！」

その指摘に、言葉を詰まらせてしまう。

下ろした両手を強く握りしめて息を呑んだ私から目を逸らさずに、セドリックは淡々と続けた。

「それに、一人に金を渡してしまえば、他の同じ境遇の者達全てにも、分け隔てなくそうしなければならなくなるだろう。そんなことが可能だと思うか？」

私は頷くことも否定もできずに、ただその場に立ち尽くした。

……確かに、セドリックの言う通りだ。

もしあの女の人にお金を渡して助ければ、聖女は偽物だと周囲に知らせてしまう上に、ここにはたくさんの人々が押し寄せて恵みを乞うなんて事態に陥ってしまうかもしれない。

——けれど。

例えそうだとしても、釈然としない感情が胸の奥で燦ぶり、私はなおも食い下がり声を張り上げる。

「あなたは、あなたは王子様なんでしょう！？ 自分の国の人達が大切じゃないの！？ 私に身に着けさせている腕輪ひとつで、あの人の子供だけじゃなく、もっとたくさんの人達だって救えるはずだわ！」

「コレット様……！」

感情に任せ言葉を叩き付ける私を止めようとしたキアランを、セドリックは片手で制す。

「もちろん、大切だと思っている。だが、一時的に特定の者に金を渡して、それで貧者がいなくなり国が富むとでも？ いいか、コレット嬢、本気で国と民を思うのなら、個々に意識を囚われるな。離れた位置から、冷静に全体を見渡せ。でなければ、肝心なことを見落とす」

私がどんなに声を荒げても、セドリックの落ち着きは微塵たりとも揺らくことはない。

碧色の瞳に真っ直ぐに射抜かれていることに、私はそこで唐突に気付いてしまった。反射的に自分の爪先に視線を落とし、力のない声で、まるで独り言のように呟いた。

「でも、でも、それじゃあ聖女って何？ 小さな子だった一人すら助けられないのに、神殿の中央に偉そうに立って、聖女だなんて呼ばれる私は、一体何なの？」

「修道院にいたお前なら、聖女が何かはよくわかってるはずだろう。神と同じ、人々の心の拠り所だ。それに、お前はお前という一人の人間であって、それ以外の何者でもない。わかったなら、大人しく自分の部屋に戻れ」

言いたいことを言うなり、彼は再び私に背を向けて去ってゆく。

「——っ……セドリックの、ヘリクツ屋ッ！」

私は眉を吊り上げ唇を強く噛み、まるで子供の喧嘩のように幼稚な文句を投げ付けた。

キアランが何かを言おうとしたけれど、今回ばかりはそれも振り切って、半ば駆け足で自分の部屋へと飛び込み、乱暴に靴を脱ぎ捨てて床に放る。

ベッドに仰向けに倒れ込んで、自分を落ち着かせるように、大きく息を吐く。

——悔しかった。

言い負かされてしまったこともだけど、何もできない自分が何よりも情けなかった。

確かに、セドリックの言うことは正しい。あの人が求めたのは聖女の力であって、お金ではない。

でも、何とかして助けたい、力になりたいって思うことも、間違えてるの？ こうしている間にも、あの人の子供が苦しんでいるのだろうに。

聖女だなんてちやほやされて、でも何もできないなんて、単なる

飾り立てられた人形と同じことだ。

私は人形なんかじゃない、私は私で……。

そこで私は、そのことに気が付き、勢いよく身を起こす。そしてクローゼットへと素早く視線を走らせた。

「そうだ、私が行けばいいんだ。聖女じゃない、単なる修道女のコレットとして！」

第7話

思い付くやいなや、じっとしてられないのが私の性分だった。すぐに手早く身支度を整え、窓を開け放つ。時は夕刻、西の空が赤く染まっている。

首を伸ばしてそのことを確認し、一つ大きな深呼吸をして、いざとばかりに窓枠に片足を掛けた時だった。

「ちょ、何してんの！？ 危ない！！」

「きゃああああ！？」

いつかの晩のように、その場にはいないはずのジェイラスがひよっこりと現れて、外に出ようとしていた私を部屋に押し戻した。

再び脱走失敗した私はがっくりと項垂れて、額に手を当てて訊ねる。

「ジェイラス……なんでまた」

「や、その……さっきのことが気になって。やっぱり嫌になって、修道院へ帰るつもりだったのか？」

彼の視線を辿り、私は、自分自身を見下ろす。身に着けた修道服から導き出した考えに、ジェイラスは表情を曇らせたようだった。

私はそれを、首を大きく振って否定する。

「違うわ、あの女の人の所へ行くの！ 顔も見られてないから、聖女じゃなくて一介の修道女として名乗っても大丈夫だと思うし、私にもできることがあるかもしれない。お願い、必ず戻るって約束するから、見逃して！」

「見逃せって言われても」

私の頼みに、ジェイラスは当然のことながら困惑顔で腕を組む。窓枠に寄りかかり、私の前に立ち塞がるようにして。

都合よく『はい、どうぞ』と言われるはずがないのは、重々承知だった。これ以上頼んでみたところで、きつと無駄に時間が過ぎるだけだろう。

思考を忙しく回らせながら私は、スカートを両手で強く握りしめる。

「もし、どうしても止めるなら」

「止めるなら？」

静かな声で冷静に問い返され、先の言葉に詰まってしまう。

つい勢いでそんな風に言ってしまったものの、元々こっさり抜け出すつもりだったから、誰かに止められた場合のことなど一切考えていなかった。

こういう場合、何て言えばいいんだろう？

そこでふと、脳裏に閃いた科白^{セリフ}があった。

前に、聖書に出てくる話で読んだ一場面。そこに、今の状況と似たものがあった。

私は深く考えることもなく、思い付いたそれを口にする。

「わ、私を力ずくで捻じ伏せるしかないわよ！」

「……………お前な。それ、女が男に言うセリフじゃねえ」

力を籠めて放たれた私の言葉に、今度はジェイラスが額に手を当てて俯き、がっくりと肩を落とす。

「わかったよ、そこまで本気なら、仕方がない。今日だけだからな」
「ほんと！？　ありがとう、私、絶対に」

顔を輝かせて身を乗り出した私を、ジェイラスは片手で止めるようにして遮った。

「ただし！　条件がある。オレも一緒に行く。この辺は森に近くて夜になれば狼とか追剥ぎとか出るんだ。コレットが一人で行くなんて無茶だ」

ジェイラスの出した条件には、さすがに逆らうことはできなかった。

けれど、私にとってはただ一緒に行くということさえも、かなりの試練だった。と言うのも、一頭の馬に二人で乗った移動だったから。

歩いて行く気満々だった私を、ジェイラスは馬の鞍に軽々と抱え上げた。

抵抗する間もなく、馬は地面を蹴り、瞬く間に周囲の景色が流れて行く。必死に鞍にしがみついているものの、後ろにいるジェイラスとの距離が近過ぎることに自然と身体が強張り、油断したら転げ落ちてしまいそうだった。

さすがにこれまでの毎日で、目を逸らしつつなら何とか三人とは話せるようになってきてはいる。けれど、ここまでの近距離に、こんなに長い時間もの間いたことなど一度もなかった。

バクバクと暴れる心臓を落ち着かせたくて、気をどこかに逸らそ

うと必死で視線を彷徨わせると、ジェイラスの腰にある二本の剣のような物に気付いた。

騎士のフリをしている時に身に帯びているものとは違って、両方共、かなり短い。

「もしかして、ジェイラスって強いの？」

この前タルトとワインを届けてくれたことからしても、追剥ぎが出るという夜に一人で街に行っても問題ないほどの腕前なのだろう。自然と口から洩れた私の問いに、彼はにやりと口角を上げたようだった。

「もしかしくなくても、オレは強いぜ？」

「ジェイラスなら、エイプリルに勝てるかな？」

「エイプリル？ 誰だそれ」

「母さんと森に住んでた頃に、川に時々来たの。あの子がいる時は、水を汲むこともできなくて。私、弓なら少し使えるけど、勝てたこと一度もなかった」

「そんなに仲悪かったのか？ 弓使うほどって、随分物騒だな。なんでそんな……話し合うとかムリなのか？」

「無理よ。私見ると雄叫び上げるし、立ち上がって襲い掛かってくるし」

「お、雄叫び？」

「うん。エイプリルは、熊だから」

私のさらりとした返答に、ジェイラスは驚愕したようだった。『ぶっ』と吹き出し、その勢いで手綱を引きかけて、軽快に駆けていた馬の足が一瞬乱れる。

「熊！？ 熊と張り合ってたのかよ！？ いやあ……それ知ったら

セドリツク様泣くわー、聖女が熊と縄張り争いとかマジ泣くわー」
「な、泣いちゃうの!？」

にこやかに笑っているセドリツクもなかなか想像は難しいけれど、泣いてるところなんてもつと想像できない。

ある意味、怖いもの見たさでものすごく見てみたいかも、と思ったのは、心の中に止めておくことにした。

それはともかくとして。

修道院でもよくあることだったけれど、自分にとっては当たり前だった日常を苦笑されてしまつて恥ずかしくなった私は、その場を誤魔化すように慌てて話題を変える。

「でも私、ジェイラス達は、強さとか関係なくて顔で騎士に選ばれたんだと思つてた」

「へ？ 顔？」

早口に告げると、ジェイラスは軽く首を傾げた。かと思えば、唐突に、心底嬉しそうに破顔する。

「そりゃオレがかっこいいって褒めてくれてんだよな？ ありがとうな！」

そして弾むように言って、屈託のない笑みで私の顔を覗きこむ。

私は、自分がどれほど馬鹿なことを口走ってしまったかということに今更ながら気付き、顔を真っ赤にして俯いたのだった。

第8話

ジェイラスが操る馬は、まるで風のように駆けた。

まだうつすらと空が明るいうちに一番近い街へと着いた私達は、あの女の人の容姿やネリーという子供のことを色んな人に訊ねて回り、そこで得た情報を元に、その家の場所をつきとめた。

それは街の外れ、すぐ傍まで迫る森に吞み込まれてしまいそうな場所に寂しくぽつんと建てられた、粗末な小屋だった。

とりあえず板で周囲を覆っただけと言うような壁や扉、それに屋根まで何もかもが傾き、今にも崩れ落ちてしまいそうな様子だ。

軽くノックするのさえも躊躇^{ためら}われ、私は上げた手を空で止め、代わりに大きな声で呼び掛ける。すると、暫くした後に扉がゆっくりと薄く開かれた。

青白くやつれた顔が、訪問者である私達を値踏みするように訝しげな表情を浮かべて隙間から覗く。

「誰？」

そこで私は、あらかじめ考えてあった科白^{セリフ}を口にする。

「あの、私、旅の修道女です。あなたの子供のことを街の人に聞いて、お役に立てることはないかと思って伺いました」

「修道女？」

呟きと同時に、黒い目が、警戒を含んだままジェイラスの腰の剣に向けられた。

慌てて私は、『彼は私の旅に付いて来てくれている護衛です』と

早口に付け足す。その説明に彼女が納得した様子なのを確認し、続けた。

「私の修道院では、病にかかった人の面倒を診ることもあるんです。だから」

そこまで告げたとたん、彼女の顔にさつと希望がさす。胡乱な表情はどこへやら、すぐに扉を大きく開け放ち、私達を中に招き入れた。

案内されて小屋の中に進むと、壁の代わりなのか、布で仕切られた奥の空間に小さなベッドが置かれていた。促されるままに、足早に近付いて床に膝を付き覗き込む。

そこには予想通り、苦しそうに顔を歪ませた幼い女の子が横たわっていた。私はその額に触れて、相当な熱があることを確かめる。

「もう三日間もこの状態なんです。ほとんど何も、水すらも口にしないで」

泣きそうな母親を宥めて病状についていくつかの質問をして、私はすぐに立ち上がった。そして、窓の外を確かめる。

まだうつすらと周囲の景色を確認できる明るさだけど、きつとすぐに夜の闇に包まれてしまうはず。

「ランプを貸して下さい」

「ランプ？」

それにはジェイラスも首を傾げる。

私は詳しい説明も後回しに、受け取ったそれを片手にすぐに外へと駆け出した。

私が探して摘んできた薬草は、よく効いたようだった。修道院では、町の人達のために薬を作る仕事を担当していた。料理とかは苦手だけど、森で暮らしていた時の知識から私は、薬草の類には少しだけ詳しくかった。

すり潰して水に溶かした薬を飲ませた数時間後には、ネリーの荒い呼吸は和らぎ、苦しさに歪んでいた表情も徐々に穏やかになっていった。

母親と勘違いしているのかもしれない。私の手を、小さな指が握り締めて離さなかった。

傍に付いて様子を見守っていた私は、手に伝わる温かさに頬を緩めて、無意識のうちに歌を口ずさんでいた。修道院で歌っていた聖歌と、それに、子供の頃に母が歌ってくれていた、懐かしい記憶にある子守歌を――。

そうしているうちに、いつの間にやら私も眠りに落ちてしまっていたらしい。ジェイラスに躊躇^{ためら}いがちに肩を揺すられて、目を覚ました。

傾いた窓から差し込む朝の柔らかな光の眩しさに目を細めて、愕然とする。

「あまりにも気持ちよさそうに寝てるもんだから、起こすのも悪い気がしてさ。でも、さすがにそろそろ戻った方がいい」

「ご、ごめんなさい！ まさか寝ちゃうなんて」

私はみつともないほど慌てて、あたふたと立ち上がる。

キヤスには『今日は疲れたからもう休む』と言って出て来たけれ

ど、さすがに翌日の昼まで無反応では、ばれてしまう。

私が怒られるのは構わないけど、ジェイラスにまで迷惑はかけたくない。

別れの挨拶もそこそこに慌ただしく去ろうとした私の手を、ネリーの母親が強く握って引き留めた。

「ありがとう。あなたのおかげで、娘は助かったわ。なんてお礼を言っていないか」

「いいえ、お礼なんて……」

すぐに踵を返そうとした私を彼女は逃がさずに、更に身を乗り出した。

「あなたの名前と、修道院の名前を覚えてくれないかしら？ 今は見ての通り生活するのもいっぱいはいで何もできないけど、いつかちゃんとお返しをしたいの」

決してお礼が欲しくてやったわけじゃない。

でも、彼女の熱心な口調と温かく力のこもった手に、その好意を断るのも失礼な気がして、私は頷いた。

「コレットです。修道院は」

けれどそこで一瞬、口を嚙む。私はもう、その一員ではないということを、微かな寂しさと共に思い出したから。

——でも。

お世話になっていた修道院の名前を教えるくらいは、院長様も許してくれると思う。

そう考えて、私はその名を告げたのだった。

馬を全力で走らせて神殿に戻った時には、陽は既に高く昇りきっていた。

人目を避けてこっそりと木から屋根に登り、窓から身を滑り込ませる。私が何の苦も無くそれをやったのけたことに、窓の所まで送ってくれたジェイラスは苦笑いしつつも、『じゃ、また後でな』と短く言い残してすぐに姿を消した。

その背中を見送ってから、ざっと部屋の様子を確認する。一見した限りでは、昨日抜け出した時と何も変わりがない。

誰にも知られないうちに戻って来れたらしい。

これまでの緊張が解けて、安堵に一人胸を撫で下ろしたその刹那。

「コレット様！？ 戻られたんですか！？」

……前言撤回。どうやらすっかりばれていたらしい。

キヤスのけたたましい声と共に、扉が何の前置きもなく大きく開かれる。

急いでいたあまり、鍵をかけるのをすっかり忘れてしまっていた。とことんどジな自分自身に呆れ、内心で呻いて、額に手を当て項垂うなだれた。

「良かった、昨日ちよつと覗いたらいらっしやらないものだから、どんなに驚いたか……！ とにかく心配で、皆ですつと探してたんですよ！？ 夜にお一人で外に出るなんて無茶もいいところですよ！ 先日だって、森で旅人が殺されたとかの噂があるんです、セドリ

ツク様もキアラン様も馬を出されて、一晚中……」

「キヤス」

低い声の静かな呼び掛けに、いつもなら絶対に回りっぱなしのキヤスの舌が、驚いたことに奇跡的にぴたりと止まる。

扉の前に静かに立った人物に、私は全身を引き攣らせる。

そこにいたのは、できるだけ会うのを先に延ばしたかった人物、セドリツクだった。

いつにも増して無表情で感情の読み取れない顔を目にした途端、昨日言い争ったことを思い出し、気まずさから爪先に目を落とす。

「だ、黙って出て行ったことは謝るわ。ごめんなさい」

それから消え入るような声で、やっとで口にする。

セドリツクは無言で私の前に立ち、ゆっくりと腕を組んだ。

恐ろしく長く感じた数秒の後、怒りを堪えるかのようにすすつ、と息を吸い込んだ彼の右手が上がり、私は思わず固く目を閉じて肩に力を入れた。

——殴られる。

「セドリツク様!？」

これにはさすがにキヤスも焦ったようで、動揺の滲んだ声を上げる。

けれど。

「どこも怪我はないな?」

叩かれる衝撃はいつまでも訪れず、代わりに、大きな手が顎に添えられて俯いた顔を持ち上げられた。驚いて、目を瞠る。

怒っているとばかり思っていたセドリツクの顔に、安堵の色が浮かんでいた。

でもそれはほんの一瞬のことで、すぐに手は離れ、私を高い位置から見下ろす碧色の目も剣呑に眇められる。微かに口角を持ち上げたのが逆に凄みが効いていて、背を冷たい汗が流れ落ちるのを感じた。

「さて、じっくり聞かせてもらおうか。言い訳を」

……やっぱり怒っているようだった。

第9話

青い芝生が裸足の足をくすぐる。

その心地よさに、私は一人大きく息をついて、雲一つない澄み渡った空を見上げた。

今日は、それぞれが一日ずっと自由に過ごして良いということになっっている貴重な休日だった。

ここに来てからというものの、聖女としての勉強や、その役目から解放されたのは初めてのことだった。

とは言え神殿の敷地から出ることはできないし、いつ誰が訪ねて来るかも分からない。

そのため私は表に面した広大な庭ではなく建物の影に隠れた裏庭を選び、柔らかな陽が差し込む一角で、ぼんやりと過ごしていた。

脱ぎ捨てた靴の隣に腰を下ろし、膝を胸に引き寄せて抱え、そして再び溜息を落とす。

街にこっそりと出掛けたのがバレってしまった五日前のあの朝、私はセドリックにこれでもかと言うほど絞られた。

キヤスの言った通り、セドリックもキアランも一晩中、森の中央に敷かれた街道から近隣の街や集落まで、私を探してひたすら馬を飛ばしていたらしい。

まさかそこまで大事おおいでになってしまふとは考えてもいなかった私は彼のしごくもつともな説教に対して反論することはできなかった。

ネリーを助けたことは、決して後悔していない。けれど、心配と迷惑をかけてしまったことに対しては心苦しさを覚えていた。

心苦しいと言えば、ジェイラスのこともそう。

あの場では彼のことは必死で黙っていたけれど、私と共に姿を消したのだから、ずっと隠し通せるはずなんか当然なかった。

ジェイラスも相当怒られたのではないかと思って私が謝ると、『気にするな。オレが自分で決めてやったことだから』といったものようにあっけらかんと笑ってはくれたけれど……。

聖女を演じることにだいぶん慣れてきたのは良いものの、あれ以来、セドリックと更に言葉を交わしにくくなってしまっていて、ここ数日というものはそのことに少しばかり落ち込んでいた。

『二度と黙って抜け出したりはしない』と約束もしたし、あれから時間も経ったこともあって、彼のほうは今ではもう怒っている様子はない。相変わらず表情のバリエーションも少なくてぶっきらぼうではあるけれど、私とジェイラスに対する態度はいつもと変わらない。

なのに私ときたら、彼に話しかけられる度に必要以上に身構えて肩を震わせてしまうのだった。

「どうしたら、普通に話せるようになるのかなあ」

あの日、叩かれることを覚悟した時に見たセドリックの表情が、なぜか脳裏に焼き付いて離れない。本気で心配してくれていたんだと思う。

「いくら怒られたのが怖かったからって言ったって、やっぱり私、失礼な態度取っちゃってるよね……」

誰ともなしに独りごち、『はあ』と本日三度目の重い溜め息をついたところで、馬の蹄の音が響いたのに気付いて顔を上げた。

大抵の訪問者は、表の大きな門から神殿へと入る。わざわざ目立

たない裏門を選んで訪ねて来る人は珍しい。

悩みは一度頭の隅に追いやることにして、誰が来たのだろうかと音がした方へと半ば興味本位で足を進める。

裏口の扉の前には、大きな馬車が一台停まれるほどの広さの玄関ポーチとアプローチがある。その先の鉄製の門の所に、人影が見えた。

馬から下りた人物を迎えたのは、使用人ではなく、キアランだった。

私は、アプローチの石畳に沿って植えられた木の影に立ったまま、様子を窺う。

訪問者はキアランに手紙らしき物を渡し、二言三言交わしてすぐにまた馬に飛び乗った。

遠ざかって行く後ろ姿を見送ったキアランは、その場ですぐに受け取ったばかりのその封を切る。

引っ張り出した便箋に素早く視線を走らせた彼の顔色が、瞬時に変わる。

いつも崩れることなく穏やかな表情が、これまで見たことがないほど険しく顰められ、何かを思案するかのように手が口元に当てられた。

一体何の知らせを受けたのかと、興味よりも不安を覚えるほどだった。

思わず身を乗り出したところで、自分が覗き見をしてしまったという今の状況に、はたと気付く。慌てて踵を返したけれど、それがいけなかった。不注意にも指先が触れてしまった枝が音を立て、私の居場所をキアランに知らせてしまう。

「コレット様？」

私がいたことに、彼の瞳がほんの僅かに動揺したように揺れる。けれどそれはすぐにいつもの笑みの奥へと隠された。手の中にあつた便箋も、まるで他愛もない話題が綴られたものであるかのように素早く畳まれ、服の内側へと納められた。

「このような場所で、どうされましたか？」

「その……ちよつと散歩してただけ」

どこことなく漂う気まずい空気に、私は苦し紛れに視線を彷徨わせる。

ふと意味もなく、訪問者が去つて再び固く閉じられた門へと目をやると、キアランは困つたように微笑む。

「街へ行きたいのですか？ お気持ちは分かりますが……」

あの晩のことをキアランは面と向かつて一切責めはしなかった。私が謝るとやんわりとそれを止め、『ご無事で何よりです』と言っただけだった。

それはそれで責められる以上に申し訳なく思つてしまい、私は何度も頭を下げ、結果、彼を更に困らせてしまったらしかった。

「ち、違うの、確かに時々は気分転換したくはなるけど、でももう勝手に抜け出したりはしないから安心して！ 本当に、絶対に約束は守るから」

両腕を前に突き出して必死に弁明すると、彼は『わかりました』と頷き、私の足元に視線を落とす。

無意識のうちに彼に倣うと、膝下までのスカートから覗く剥き出しの、少し汚れた足が目に飛び込んだ。

靴を置いたまま芝生を越えてここまで来てしまったことに今更ながら気付く。

自分がどんなにはしたないことをしているかを自覚した途端、恥ずかしさから、瞬く間に顔に血が上るのを感じた。

誰にも見られていない暖かい場所で、ほんの少しだけのつもりだったのに――。

「あまり長い間そのままでしたら、風邪をひきますよ。冷たい土ですっかり冷えてしまったのではありませんか？」

キアランは『湯を用意させましょう』と言い、相変わらず申し分ないほど完璧な仕草で腕を差し出す。私はほんの一瞬だけ悩んだ後に、彼に大人しく従った。

どうかこのことがセドリックの耳には入りませんように、と内心で祈る。

そしてそこで、不思議なことに気付いて瞬いた。

これまでなら、怒られるのが嫌でただそう願ったはずだった。――や、もちろんいつだって怒られるのはできる限り避けたいのだけれど。

でも今は、それ以上に、彼に自分の失態を知られるのを恥ずかしく思っている。

彼に幻滅されたくないと思っている。

何でだろう？　今までこんな風になんて、一度も考えなかったのに――。

第10話

「どうやら、カルヴァートにも聖人が現れたらしい」

翌日、謁見の間に立つ前に四人が顔を揃えるなりセドリックが開
口一番に告げたのは、思ってもいなかったことだった。

隣の国にも聖人が――。

私達は、それぞれ息を呑む。

昨日キアランが受け取った知らせはもしかしてこのことだったの
かもしれないと、ふと頭の中で二つが結びつき、私は無意識のうち
に彼に注意を向けていた。睫越しにこっそりと顔色を窺う。

けれど、キアランも今初めて知った話だということが、その微か
に見開かれた琥珀色の目に表れていた。

「聖人が……それは、本物でしょうか？」

彼は、誰もが真っ先に考えるだろうそのことを、落ち着いた声
でセドリックに確認する。

聖女は、広い大陸中で、ここライナグル国に唯一無二の存在だっ
たというわけではない。人にはない不思議な力を持っていたとされ
る聖人の伝説は、少なからずどの国にもある。

だから、こういった話が舞い込んできても決しておかしなこと
ではないと言えば、そうなのだけど……。

「わからない。だが、もしそれが本物であれば、こちらの立場が一
気に危うくなってしまうということだけは確実だ」

キアランの問いに対してセドリックは、ソファに腰掛けて足を組んだまま、まるで何でもないことだとも言うように淡々と答える。けれど、肘掛けに置かれた彼の人差し指は、何かを深く思案するかのように、トン、トンと小さくリズムを刻んだ。

再びこの場に沈黙が落ち、私とキアラン、そしてジェイラスはそれぞれ眉根を寄せて顔を見合わせる。

もし、本物だったら――。

それが一体どんな意味を持つか、私にもわかる。

人々が本物の奇跡を目の当たりにしたら、ただそれらしい文句を唱えるだけの聖女に、遅かれ早かれ疑問を抱き始めるのは必至のはず。

そして……この大掛かりな舞台の結末は、どうなってしまうのだろうか？ そこまでは想像がつかない。……と言うよりも、想像したくない。

唐突につのつた不安が身体中を駆け巡り、今にも震え出しそうな自分の肩を強く抱きしめた。

「もしかしたらだけど」

部屋に満ちた重い空気を取り払うかのような明るい声でジェイラスが、ひとつの可能性を考えながらといった様子で口にする。

「もしかしたら、隣までコレットの話が伝わって、張り合おうとしてるのかもな。あのカルヴァート王なら、充分やりかねない」

『あのカルヴァート王』って、元々こちらの国王陛下がカルヴァート国の大聖堂に対抗するために聖女を作り上げたのだから、それってまさに『自分のことは棚に上げて』というものになるのでは…

…。

私はこっそり内心でそう思ってしまったけれど、意外なことに、セドリックもジェイラスに同意して慎重に頷いた。

「確かに、それも十分に考えられる」

……もしかしたらライナグルとカルヴァートは、昔からこのような感じで見栄の張り合いをしている間柄だったりするのだろうか。私は胸に満ちた不安がほんの少しだけ和らぐのを感じて、心を落ち着かせようと、小さく息を吐いた。

——やめよう、まだ起こってもいない悪いことを考えるのは。

頭の中で自分に言い聞かせ、できる限り明るい声を努めて訊ねる。

「これから、どうすればいいの？」

セドリックがゆっくりと立ち上がって私達三人に視線を回らせ、
めく
決然と告げた。

「このままこちらでも今まで通り続ける。カルヴァートの聖人については、そのうちまた詳しい情報も入るだろう」

それから、私に一言注意するのもすっかり忘れなかった。

「コレット嬢。動揺してしくじるなよ」

けれどこの後、動揺してしくじるよりも最悪な方向へと事態は進

んでしまう。

神殿で順番を待つて私の前に立ち、顔を上げた人物に、心臓が一瞬鼓動を止めた。お互いを凝視して固まってしまう。

それは、ネリーの母親だった。彼女の胸にはしっかりと愛娘が抱かれている。

「あなた……！」

彼女は愕然と目を見開いて息を呑み、私は呆然と言葉を失って立ち尽くす。私の背後で、ジェイラスも驚愕の声を微かに漏らしかけ、それを慌てて呑み込んだのが心配でわかった。

どどどどうしよう、どうしよう、これってものすご
いまずい状況よね、て言うかまずいどころか、隣の聖人とか関係なしにもう終わり！？

頭の中が真っ白になると同時に両足が震え出し、その場につく
りと膝と両手を付いてしまいそうになるのを何とか必死に耐えた。

「そう、あなたが……」

悄然とした呟きに、次に彼女の口から飛び出すであろう衝撃に備
え、全身に力を入れて身体を固くする。

『この聖女は偽物だ、単なる修道女にすぎない』と、声高に嘘を
暴かれるのを覚悟して、顔を伏せるように俯いて唇を強く噛み締め
る。

私の一番近くにいたセドリックも事態を察したらしい。私と彼女
の間に割って入ろうと、彼が一步足を前に出した、その刹那。
手を優しく取られるのを感じ、弾かれたように顔を上げる。私の

想像とは裏腹に、穏やかに微笑む黒い瞳とぶつかり、驚きのあまり瞬いた。

「お礼に差し出せる物すら何もない私のような者の願いを聞いて下さって、ありがとうございます、聖女様」

そう言っただけは、その場に両膝を付き、深々と頭を下げる。彼女の片腕に抱かれたネリーが、慌てて母親にしがみ付いたほどだった。

途端、神殿内にいた数十名の人々が、興味津々で私達に向かって身を乗り出す。

一番奥の一段高くなっているこの場所にまで人の波が押し寄せそうになって、慌てて私の後ろに控えていた三人が前に出て彼らを制したほどだった。

「おい、アンタ、聖女様に助けられたのか!？」

ネリーの母親の次に順番を待っていた壮年の男性が、彼女に勢い込んで訊ねる。

「ええ、娘の病気を治して下さいなんです。聖女様の歌に、苦しんでいた娘もあつという間に癒されて、今はこの通り元気に」

突如騒然となった周囲に気を取られ、忙しく首を回らせていたネリーが、食い入るように私の顔を見つめたかと思うと、大きな丸い目をぱつと輝かせた。

細い両腕を目一杯伸ばす。母親が微笑み、娘を優しく差し出した。私は躊躇^{ためら}うことなく、ネリーの小さな身体を両腕に受け止める。

少女の確かなぬくもりに、これまでの不安と緊張が一気に解けてゆくのを感じて、情けないことに安堵の涙が溢れそうになってしま

う。

「おうた、うたって」

「ネリー……」

『今はできない』と言いかけて、セドリックと視線が重なる。すると意外なことに彼が頷いた。

私は、頬を緩める。困ったような、はにかむような、おかしい顔をしているかもしれない。

それを隠すように、ネリーの額に自分の額を寄せて、あの日歌った子守唄を歌う。

聖堂でシスター仲間と歌う時のように高らかに声を張り上げてではなく、優しく囁きかけるように――。

ネリーがくすぐったそうに笑い、私の胸に頬を摺り寄せる。彼女のあどけない笑顔に、私までつられて破顔してしまう。

こんなにたくさんの人の前で歌うのは初めてだったけれど、歌い始めた私の目にはネリーの存在しか映らなくなっていた。

幼い彼女のために、歌う。静かに、穏やかに、心を籠めて。

決して短くはない歌が終わって気付いてみれば、周囲は水を打ったように静まり返っていた。

神殿を訪れていた訪問者のみならず、セドリック達まで、その場にいる全員が自分に注目していることに改めて気付き、急激に全身が熱を帯びるのを感じた。

慌ててネリーを彼女の母親の腕へと返す。

「今日はここまでね」

恥ずかしさを誤魔化すように早口に言うと、ネリーは『もっとと駄々をこねてぐずり始める。』

けれどその泣き声は、次の瞬間に爆発するかのように沸き起こった歓声の中に呑み込まれてしまったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127z/>

偽りの聖女

2012年1月12日22時57分発行